

北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース

No. 50 2018. 9

高倉新一郎先生小伝一息子が語る高倉新一郎（第2回）
学者 高倉新一郎

高倉 嗣昌 ----- 1

博物館ボランティアの会総会（2018. 5. 25）講演報告
プロニスワフ・ピウスツキ没後百年記念行事
～ポーランド、サハリン、北海道～

安藤 厚 ----- 5

古新聞の映画館広告から

久末 進一 ----- 7

公益財団法人「ふきのとう文庫」を訪ねて

石田多香子 ----- 8

『都ぞ弥生』の作詞者横山芳介、作曲者赤城頭次の人と業績

山田 大隆 ----- 9

特別寄稿

高倉新一郎先生小伝一息子が語る高倉新一郎（2） 学者 高倉新一郎

公益財団法人ふきのとう文庫代表理事・北海学園大学名誉教授 高倉 嗣昌

はじめに

私も終始大学に所属し研究生生活を送って来た人間の端くれでしたし、専門が社会科学系でしたので、学者高倉新一郎と共通する領域や舞台が少なからずありましたが、広く活動した新一郎の全貌を描き出すことはとてもできず、私の視野に入ったごく断片的な記述に留まることをお許しいただかねばなりません。

高倉新一郎は1902（明治35）年11月23日、十勝帯広の地で商店を経営する高倉安次郎・かつの第2子、長男として誕生しました。戦前の皇室行事《祭日》だった新嘗祭^{にいなめ}に生まれたので新一郎とつけたようです。

1. 学者への道

商家の跡取りであり、はじめから学者を志していたわけではなさそうです。

学者高倉新一郎を生み出した動機は主に三つあったと思います。

第一は、尋常小学校卒業期に、帯広にはまだ旧制中学校がなく、札幌一中（今の札幌南高）を受験し、その年帯広から唯一人合格して札幌に出て来たこと（写真1）。

第二は、それをステップとして、北海道帝国大学予科に入学したことにより「学問の府」に飛び込んだことです。



写真1 庁立札幌第一中学校
2年生の頃（1917年11月）

第三は、父安次郎が起こした事業を継ぐ立場から、1923（大正 12）年当時北海道帝国大学で唯一の文科系部門であった農学部農業経済学科に進学したのですが、父の事業が不安定で進路が定まらない中、指導教授高岡熊雄先生（後に第三代総長）の勧めもあり、大学に残ったことです。

2. 博士論文「アイヌ政策史」

（1）テーマを選んだ動機

帯広時代、叔父高倉佳造が開いていた農場の近くにアイヌ人の集落があり、そこに住むアイヌの人々の貧困を目の当たりにして、「民族問題」に関心を持ちました。

（2）博士論文をまとめ認められるまで

大学の卒業論文は「北海道旧土人政策の研究」（1926 年）で、この頃からテーマ設定ができていたと言えます。

北海道帝国大学助手になりましたが、同大学の司書を併任し、歴史上の文献に接し易い立場に就くことができましたので、こつこつと北海道に係る古文書の解読などに取り組み研究を蓄積していきました（現在私が保管している新一郎の研究ノートは膨大なものです）。

（3）博士号の授与

博士論文として「アイヌ政策史」を北海道帝国大学農学部農業経済学科に提出しましたが、拓殖政策が主なテーマの学科で歴史研究を正当に評価できる人が存在せず、「お蔵入り」の状態になりました。

一方勧める人があって 1942 年、それを出版したところ反響がありました。

特に当時東京帝国大学の東畑精一教授から、「歴史的に異民族との関連を研究したものが少ない中、他民族との交渉が緻密に描き出されている論文は大変貴重」という主旨の評価を得たのです。

農業経済学科としても放っては置けず審査に至り、1945 年に学位授与となりました。

（4）「アイヌ政策史」のその後

新一郎の学者としての登竜門となったこの論文の評価は、その後曲折をたどります。

「アイヌの民族問題」を正面からとらえた先駆的な論文としての位置づけは定着していると思わ

れますが、その後民族問題の見方や解釈が大きく変化し、今日の日から見ると積極的評価ができない面があることは事実です。

1972 年、初版本が大変ミスプリントが多かったため、本人の強い希望もあり、再販されたので又注目を浴びる機会もありました。

本人が他界した（1990 年）後、「高倉新一郎著作集」（全 12 巻）が次々と刊行されましたが、第 5 巻「アイヌ政策史」の「解題」をめぐって行き詰まり、停止したままになっています。

他方、アイヌ人及びその文化に対して愛情を注ぎ、早くからその保存や継承に力を入れて来たことは評価されていると思います。

（5）評価に対する本人の反応

これに関連して、新一郎の苦悩を表す二つのエピソードを書かせていただきます。

①「アイヌ政策史」のダイジェスト版が翻訳され、それを読んだアメリカ研究者に新一郎が面会したとき、最初の質問が「あなたはアイヌの血を何%引いているのですか？」でした。「多分 0%だろう」と答えたら相手は怪訝な顔をしたのでドキッとしたそうです。自分の民族の研究をするアイヌ人研究者は大変希少な状態で、「和人がいかにかアイヌ人文化や教育を殺してきたかを改めて実感させられた」と語ったことです。

② アイヌ文化を広く紹介する共著の本を出版したところ、その中の一枚の写真に写っていたアイヌ人女性から肖像権侵害を訴えられ、あるマスコミから「民族の悲しみを忘れたか！」と批判された時（裁判では和解—事実上の敗訴）、ポツリと「長生はしたくないな」と言ったことです。

3. 学識経験者 高倉新一郎

（1）郷土史研究家としての飛躍

博士号の取得は新一郎の研究生活の中では一部にすぎず、それらが総合的に認められて 1949 年北海道新聞文化賞を受賞したこともあり、その知名度を高めて行きました（写真 2）。

とりわけ北海道の歴史、郷土史に関連する人々から広く認められ、「北海道史と言えば高倉」のイメージが定着していきました。



写真2 北海道新聞文化賞受賞記念(1949年11月
自宅書斎にて)。右から父新一郎、嗣昌、母とき

現に道内の多くの地方史の編集委員、監修者、顧問、序文の執筆等の役割を務めています。

やがて北海道内郷土史研究者のまとめ役と後継の指導にあたるようになりました。その代表的存在が「北海道史研究協議会」です。

(2) 民俗学、文化財保護活動等への進出

新一郎はアイヌ文化の発掘や保存への造詣を深め、評価されて来ました。

民俗学の大家柳田國男さんとの親交もあり、戦後間もない頃、現存する高倉旧宅に宿泊されたことを覚えています。

又、太平洋戦争末期の1945年に、「満蒙(現在の中国東北・内モンゴル地区)民族調査」を命ぜられ出張しています。よく無事に帰って来られたものです。

戦後は、道や市等の文化財保護委員・専門委員を長年にわたり務めたり、地域研究組織である「北海道帝国大学北方文化研究室」の創設をはじめ、北海道開拓記念館(当時)の設置に深く関わる等の文化施設づくり、千島列島研究を通じ、歴史的に確かな裏付けを持った「北方領土問題」を手掛けてその返還運動に加わったり、全道各地に出かけて「古文書解説講座」の講師を務めるなど新一郎の専門領域に関連した公職もかなりの数になります(写真3)。



写真3 古文書解説講座(1977年10月、
道庁赤レンガ庁舎にて)

又、新一郎は天皇や皇太子が来道されたおり、昭和天皇、今上天皇の皇太子時代、現皇太子の三代にわたって、北海道の歴史や文化をご説明する役割の榮譽に浴しています(写真4)。



写真4 皇太子殿下(今上天皇)に北海道史資料について
ご説明(1956年)。左は北海道知事田中敏文氏(当時)

(3) 多彩な役割に就く

新一郎が関係した「単行本」は優に百冊を超えており、論文、感想文、書評、座談会の収録など数えると一千近くに及び、歴史や民俗学に限らず、内容も多様です。

専門分野に限らず、頼まれたらまず断ることがない性格のせいか、仕事をした範囲は簡単に整理がつかないほど広がりがあり、「間口の広い高倉さん」と新聞に書かれたこともありました。

公職を見ても、いちいち職名は書きませんが、総合開発関係、農業関係、労働・賃金関係、生活・物価関係、福祉・保健関係、暴力追放・青少年育成関係、広報関係等の他、文化賞の審査・選考、

記念事業の企画なども多数あります。

民間組織の関係でも、道内で活躍した先覚者や外国人の顕彰活動、民間組織の歴史編纂、道内民間研究組織の長やメンバーに名を連ねています。

4. 学派、学会、お弟子さん

(1) 高倉新一郎の「学派」

私が北海道大学経済学部の学生だった時、丁度新一郎は経済学部の教授（学部長）でした。その頃の経済学は、マルクス経済学・近代経済学の二者択一的流れがあり、学部移行時の教官紹介の機会に、司会の先生がどっちに属するかが披露されました。父に順番が廻って来た時、そのどちらとも言えないドイツのワグナーやブレンターノに代表される「歴史学派」であると話され、それまで父の学派など深く考えたこともなかった私は「オヤッ」「なるほど」と思った次第です。

父が研究者として駆け出しの頃はマルクスを読んだだけでにらまれる時代で、とくに左翼運動をしたわけではないのに「特高警察」に監視されていたことがあったようで、若い頃の父の立場を垣間見ることができます。

(2) 学会活動

父の学会活動を私は殆ど承知していません。社会経済史学会や土地制度史学会などでは、か

なり活躍していたことは知っていました。

私として学会活動を通じて父の存在を実感したのは、年代がずれていて一緒にはなりませんでしたが、北海道社会学会の会員としてでした。

その学会の席上で、「北海道に『村落共同体』はあるのか？」が議論されたことがありました。その過程で、「高倉新一郎先生は『北海道に村落共同体はなかった』と言っておられましたが・・・」という発言があり、それ以後誰も何も反論せず、議論にならなかったのも、父の学者としての発言の重みを感じたものです。

(3) お弟子さん

新一郎は一貫して大学教育、それも殆どの期間を北海道大学農学部にて在職しておりました関係で、農業経済関係の学会で重きをなす学者、研究者を名前をあげればきりが無いほど多数「育成」して来たことは確かです。

しかし新一郎の「北海道史学」とでも言うべき領域を受け継いだ「直弟子」は多くありません。殆どは子弟関係というより、「研究仲間」に近かったのではないのでしょうか。

「直弟子」としてまず頭に浮かびますのは、私も北海道大学大学院経済学研究科で直接指導を受けましたが、父の出身学科の後輩でもある林善茂北海道大学名誉教授です（経済学部での担当科目は「北海道経済史」）。

~~~~~



2018 年夏季企画展開催中 !!

## 「視ることを通して」

北海道大学総合博物館と放送大学付属図書館が所蔵している学術資料コレクション、写真などのビジュアル資料が担ってきた機能や切り拓いてきた局面、そして研究者の営みをぜひご覧ください。

期間:2018 年 10 月 28 日まで

場所:北大総合博物館1階 企画展示室

時間:10:00~17:00(金曜日は 21:00 まで)

休館日:月曜日(祝日の場合は翌日休館)

## 博物館ボランティアの会総会 (2018. 5. 25) 講演報告

## ブロニスワフ・ピウスツキ没後百年記念行事～ポーランド、サハリン、北海道～

北海道大学名誉教授 (文) 安藤 厚

## ◆「ピウスツキ蠟管のアイヌ語」展示

当博物館 1 階廊下に「ピウスツキ蠟管」の展示があります。20 世紀初頭にサハリンと北海道でアイヌ民族文化の学術的研究を行ったポーランドの人類学者ブロニスワフ・ピウスツキ (1866～1918) の残した蠟管レコード 65 本が 1983 年にポーランドから北大に持ち込まれ、応用電気研究所 (現電子科学研究所) の朝倉利光・伊福部達教授らの研究により再生され、その内容は ICRAP (B・ピウスツキ業績復元評価国際委員会) 言語・音楽班 (池上二良、大島稔、萱野茂、切替英雄、佐藤知己、谷本一之、藤村久和、村崎恭子氏ら) によって分析されました。

当時開発された蠟管録音再生装置と、蠟管のレプリカや、再現されたアイヌ神謡など (蠟管 6 と 7 の一部) の原文と日本語訳が展示されています。

(録音の全体像は *The collected works of Bronisław Piłsudski*, v. 3, edited by Alfred F. Majewicz, Mouton de Gruyter, 1998, pp.609-42: The contents of the recordings, No. 1-[63] に記されています。各蠟管の録音時間は 2～2.5 分で、現在は全部が CD1 枚に収められています。以前は展示で音声の一部を聞けましたが、今は聞けないのは残念です。以下で 20 秒の音源が聞けます。)

<http://panda.bg.univ.gda.pl/ICRAP/ainu.mp3>

## ◆世界各地のピウスツキ記念行事

ピウスツキの生誕 150 周年 (2016) や没後 100 周年 (2018) に世界各地で記念行事が催されました。

(1) 展覧会「ブロニスワフ・ピウスツキ～ポーランド元帥の非凡なる兄」ザコパネのタトラ博物館 2016.6～11 (リトアニア・ヴィリニウス 2017.11～2018.2、ベラルーシ・ミンスク 2018.3～5 でも巡回展示)

(2) 記念野外劇「ブロニスワフ・ピウスツキ同時代のサハリン」ロシア・ユジノサハリンスクのサハリン州郷土博物館、2016.7～9

(3) 百年忌 (2018.5.17) 追悼行事 (パリ) モンモランシー墓地で墓前に供花、ポーランド科学アカ

デミーパリ学術センターで記念講演、ノートルダム大聖堂で追悼荘厳ミサ

(4) 展覧会「アイヌの世界～ブロニスワフ・ピウスツキから萱野茂まで」2018.5.19～11.11、ポーランド初、世界で 3 番目の記念碑の除幕式 5.22 (写真①:尾形芳秀氏提供)、ジョルイ市立博物館

## ◆日本におけるピウスツキ記念行事

日本でも、北海道ポーランド文化協会が主催・参加して、没後 100 周年記念行事が催されました。

(1) 朗読会「午後のポエジア 7」没後百年記念〈詩劇〉ピウスツキ、ドラマシアターども (江別市)、2017.5.27 (写真②:尾形芳秀氏提供)



①



②



③

(2)百年忌(2018.5.17)追悼行事(白老)旧アイヌ民族博物館内で、アイヌ式で祈りピウスツキ像前で舞踊を奉納(写真③:野本正博氏提供)

(3)没後百年記念「講演と映画と朗読の集い〜ポーランド、サハリン、北海道」、北海道大学学術交流会館、2018.7.29

#### ◆没後百年記念「講演と映画と朗読の集い」

[第1部]講演:井上紘一(北大名誉教授)ブロニスワフ・ピウスツキの生涯と仕事、佐々木史郎(国立民族学博物館名誉教授)ピウスツキが収集したアイヌ衣文化、新井藤子(北大大学院)ピウスツキが日本に残したイメージ〜明治から現在まで〜

[第2部]ドキュメンタリー映画『ピウスツキ・ブロニスワフ〜流刑囚、民族学者、英雄』2016 ヴァルデマル・チェホフスキ監督(日本語字幕付き)

[第3部]朗読:長屋のり子[自作詩2017.5、改作]盲いたチュフサンマの悲歌、白井順[花崎皋平作、2018.5]チュフサンマとピウスツキとトミの物語より、酒谷茂靖[土橋芳美作2017.3]痛みのペンリウクより/[同、2018.7 書下ろし・初演]ペンリウク バフンケ 26時のペウタンケ

講演で井上氏は、ピウスツキの生涯を、その居住地に沿って6期((1)リトワニア期1866~85、(2)ペテルブルグ期1885~87、(3)サハリン前期1887~99、(4)浦塩期1899~1902、(5)サハリン後期1902~05、(6)日本経由で帰還して以降の欧州期1906~18)に分け、主な事績を解説し、アイヌ民族の家族(妻チュフサンマ、長男助造、孫和保、妻の叔父バフンケなど)を含む、数多くの写真を紹介しました。



④ピウスツキの油彩肖像画、1912、クラクフ、アドマス・ヴァルナス作、スレユーヴェクのユゼフ・ピウスツキ博物館蔵(画像ヴィトルト・コヴァルスキ氏提供)

佐々木氏は、上掲の肖像画④のアイヌ衣装をピウスツキが収集し各地の博物館に収蔵されているアイヌ衣装と比較し、最も似たものはロシア民族学博物館が所蔵する、V・P・ヴァシーリエフが

1912年にサハリン東海岸のアイ・コタン(後の栄浜村相浜:1904年まで彼が妻子と共に暮らした村)で収集したものと指摘しました。

新井氏は、「アイヌ救済を一生の大責任と心得て、東京まで出てきた。ところが〈…〉ご当人はといえば、囊中しばしば空しというありさまで、衣服などは粗末で食物などは何をも選ばぬ、いのちさえつなげば、それで充分だ、どうしてもアイヌのごとき憐れむべき人種を保護しなければと考えている。局外からみれば、実にばかげているようだが、そのあどけない真面目の態度が、われわれの同情を惹くところである」(二葉亭四迷、1907)、「政治を好まず、また政治を理解しなかった。〈…〉学問も、決して彼を完全に包み込み充たすことはできなかった。彼は生まれながらの改革者・使徒であり、新たな道の探究者・発見者であった。〈…〉彼は、弟[ユゼフ元帥]のように現在の泥から、未来のすばらしい聖堂を築くための煉瓦をかたどり、焼くことができなかった。彼の〈…〉あの度重なる移住、〈…〉あの果てしない放浪はそこから生まれたもので、彼の並外れたエネルギー、才能、類まれなる知識はその中でいたずらに費やされてしまった」(ヴァツワフ・シェロシェフスキ、1921)など、彼を身近に知る人々の言葉を引いてその希有な人物像を紹介しました。

朗読では、残された妻チュフサンマの夫への思いを描いた長屋氏の自作詩、ピウスツキとチュフサンマの物語と、長年共に生きたアイヌ女性トミを描いた花崎氏の長編物語詩、北大「アイヌ納骨堂」に遺骨が眠る二人の村長(平取のペンリウクと樺太のバフンケ)の交流を描いた土橋氏の書下ろし長編詩が朗読され多くの聴衆の心を打ちました。

近年のブロニスワフ・ピウスツキへの関心の高まりの発端には、北大における蠟管録音再生プロジェクトがありました。

また、本記念行事の直前には、北海道大学が木村愛吉(バフンケ)氏の遺骨をブロニスワフの孫木村和保氏に返還すると通知しました。ピウスツキ記念の想いは、国立アイヌ民族博物館・「民族共生象徴空間」の建設や、アイヌ遺骨返還問題など、アイヌ民族を巡る最近の動きとも深く結びついているのです。

## 活動報告

## 古新聞の映画広告から

図書ボランティア 久末進一

植物標本作りの古い押し葉新聞には、時々、見たことの無い映画広告が載っている。

今から 88 年前の昭和 5 (1930) 年 5 月 6 日付け「北海タイムス」紙が全紙判 1 ページを費やして歴史的超大作と大宣伝しているのが、日活映画『撃滅』である。

この日、札幌「美満寿館」で封切り上映となったのは、海軍省後援による、日露戦争日本海戦から 25 周年記念製作という映画。

なにしろ帝政ロシアのバルチック艦隊をまさに撃滅した、連合艦隊の司令長官だった東郷平八郎元帥 (1848-1934) に、当時の砲撃戦の推移など海戦再現の指導を仰ぎ、本人の特別出演も実現させたほどの熱の入れようで、製作陣の意気込みが伝わる。

監督村田實、小笠原明峯、主演夏川静江、中野英治、入江たか子、小杉勇、英百合子ら、当時の映画スターが総出演。モノクロ・スタンダード 10 巻のフィルム 2,324m、上映時間 85 分の記録がある。

但し、映画広告には大きく熊谷暁風、松平夢郷、都琴聲らの名前と、美満寿管弦楽団の奏楽とある。

つまり、専属楽士の伴奏付きで、彼ら活動写真士 (カツベン) が、スクリーン映画の動きと字幕に合わせ、筋書きの展開を流暢に説明する。『撃滅』はサイレント (無声) 映画だったのだ。

だが、エジソン (米) 発明の発声映画トーキー (talkie) は、日本映画界で導入されつつあり、転換期に拮抗する無声と発声は、やがてトーキー主流に変わる。そして、時代も転換期を迎える。

『撃滅』封切りの翌年、昭和 6 (1931) 年 8 月 1 日、日本初トーキーの松竹映画『マダムと女房』 (監督五所平之助、主演田中絹代) が公開され、この 9 月 18 日、中国奉天郊外柳条溝で満洲鉄道線路爆破に始まる満洲事変が勃発した。

戦乱時代開幕直前の社会風潮の中で、時代後れになりかかっている、活動写真を選んだ海軍省の

思わくは何だったのか。

まだ、舌足らずのトーキーより、観客は心をゆさぶる弁士の語り口の方にこそ感情移入し、共感する。大衆が涙し、奮起し、国民として自覚する国威昂揚のプロパガンダが秘められていた映画らしきことは推察できる。そんな時局を反映した『撃滅』も、内容があまり知られないうちに、無声映画時代と共に消滅してしまった。

昭和 7 (1932) 年には、弁士らの解雇反対ストライキやら、失業楽士のチンドン屋転職騒ぎもあった。

「美満寿館」(札幌区南 5 条西 3 丁目) は大正 10 (1921) 年開館しており、当時から娯楽の殿堂は「錦座」「帝国座」「中央館」「遊楽館」「金春館」「松竹館」「エンゼル館」などが繁華街で賑わっている。

こうした活動写真館時代から、映画は劇場で鑑賞する真摯な芸術だったことがわかる。

映画はそれぞれの盛衰の歴史を刻むが、この「美満寿館」も「札幌大映」「東宝公楽」「札幌東宝」など劇場名を変えながら、平成 22 (2010) 年閉館まで続く。

北大総合博物館 3 階図書室前廊下の壁面に続く明治・大正、昭和の新聞展で、押し葉新聞の中から発見されたこの『撃滅』広告の実物新聞が公開されている。ぜひ、ご覧ください。



日活映画『撃滅』の新聞広告

博物館訪問記

公益財団法人「ふきのとう文庫」を訪ねて

菌類ボランティア & 第2農場ボランティア 石田多香子

北海道大学の南、北8条通りを西へ行くと11丁目（石山通り）に出ます。それを横断した北6条西12丁目8（中通南向）に今回訪問の「ふきのとう文庫」がありました。

この辺りは明治末期から札幌農学校（現北大）の教授が幾人も暮らし「博士町」とよばれていたそうです。そのお一人、植物学者の宮部金吾先生の住宅跡は「宮部記念緑地」として整備され「クロビイタヤ」の樹が雄々しく茂ってありました。

今回案内して下さった「ふきのとう文庫」代表理事・高倉嗣昌さんは、農業経済学者で「新北海道史」の編纂で知られる郷土史研究家でもある北大名誉教授の高倉新一郎先生（1902-1990）の御子息でした。高倉さんは現在『ボランティアニュース』誌上で「高倉新一郎先生小伝」を執筆してくださっています。

公益財団法人「ふきのとう文庫」は「すべての子どもに本の喜びを！」を基本理念に、子ども図書館として本の貸し出し、障がいをもつ子と、もたない子のふれあいの場になることを願い、児童書を中心とした図書の貸し出しをしています。また、障がいをもつ子どもたちのための創意工夫をした布の本や拡大写本などを製作し、展示もしています。



ふきのとう文庫内部の様子（ホームページより）



ふきのとう文庫全景（ホームページより）

全蔵書は約 16,000 冊。そのうち「布の本」700 冊、「拡大写本」400 冊とのことです。

この図書館のルーツは 1970 年、岩波書店の元編集者だった小林静江さん（2017 年 12 月逝去、享年 92）が障がいのある子ども向けに自宅（江別市大麻）を文庫として開放したことに始まります。

その活動は入院児童へのベッドサイドでの読み聞かせから病院文庫へと繋がり、その過程で「布の本」のアイディアに至り、研究開発して全国で初めて布の本を世に出したそうです。

1982 年小林さんが私財を投じて札幌市西区平和に図書館を開設し、そこを拠点に布の絵本づくりを続けてきました。しかし、30 余年が経過し、建物が老朽化したことに加え、交通の便も悪く利用者也減少してきたことから、小林さんの後を継いで代表理事を引き受けた高倉嗣昌さんが、自宅敷地の一部を無償で提供されたことで、この「博士町」に 2014 年 2 月新築移転されました。

ふきのとう文庫

外観は青みがかったグレイの 2 階建て、左手庭側と、玄関上の 2 階部分の白い柵が印象的です。玄関を入ると木の香りがします。

この地にあったというスズメバチの大きな巣に興味深々、子どもたちが作ったという七夕飾りと願い事も飾られていました。

受付の左側に児童図書が奥のほうまで本棚に並び、奥にはゆっくりと閲覧できるように可愛い椅子とテーブルが備えられています。そこには「布の絵本」が沢山！フェルト材にボタンやマジックテープ、ファスナーなどを使い自由にパーツを外したり付けたりして遊ぶことができます。障がいがある子ども達にとって手指の機能や思考の訓練になりますが、どの子も楽しめます。

受付の奥には「うたとおはなしの会・手作りあそび」が開催される多目的ホールがあります。

2 階にはボランティア活動室がありました。「布の本製作室」と「拡大写本製作室」に分かれ、それぞれ中央に作業台があり、周囲の壁には製作に必要な教材・材料・備品が山のように、しかも種類別の箱に収められて、整然と整理されていました。

「拡大写本」は弱視児のために文字や絵を大

きくし、色が鮮明になるようクーピーペンシルで丁寧に手描きされていました。その他じゃんけんができるサイコロはフェルト製、キャッチボールができるグローブはクイックロン布地製です。

活動は全てボランティアの手で行われているとのことです。(登録ボランティア・約 100 名)

#### ふきのとう文庫

開館日・日・月・火・水

時間・午前 9 : 30 ~ 午後 4 : 00

最後に・・・敷地内の木造屋敷は 1921 (大正 10) 年頃建てられた洋館 (1 階洋風・2 階和風) には、高倉新一郎先生が調査・研究された郷土史や資料・文献がぎっしりつめこまれているとのこと、近い将来この「博士町」に子ども図書館と併設した高倉新一郎資料館が開かれることを願いつつおいとしました。

## 『都ぞ弥生』の作詞者 横山芳介、作曲者 赤木頭次の人と業績

図書ボランティア・前酪農学園大学教職センター 山田 大隆

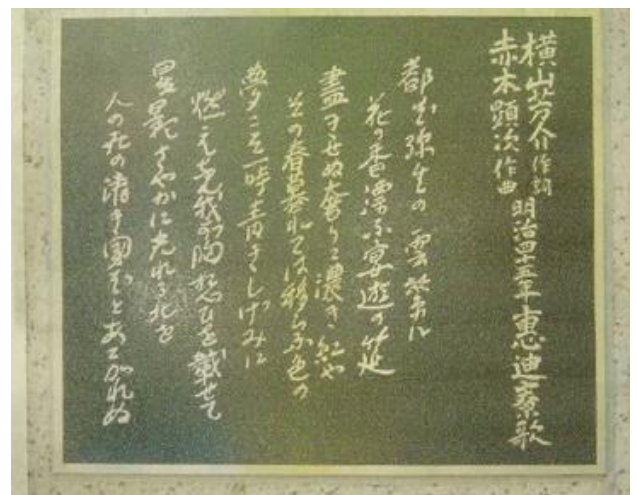
北海道大学は、札幌農学校 (1876-1907) に始まり、今年 (2018) で 142 年を迎えた。17 年前の創立 125 年 (2001) に、多くの記念行事と出版がなされた。

この明治・大正・昭和・平成の 4 代の明治以降の近代化の中で、筆者は以下の 3 つの全国に誇る北大の学術・文化の誇りを指摘したい。

第 1 は、札幌農学校の初期に輩出した国際的文化・学術の人材 (廣井勇、内村鑑三、新渡戸稲造、宮部金吾、志賀重昂、有島武郎、松村松年ら)

第 2 には、戦中戦後の世界的な学術の人材 (中谷宇吉郎、半沢洵、長尾巧、湊正雄、牧野佐二郎、木原均、毛利衛、鈴木章ら)

第 3 には、戦前に 3 大寮歌と評価され、明治 45 (1912) 年の発表後に札幌農学校精神継承の象徴として広く歌われ、北大の学生教員の精神文化形成に多大の影響を与えた、恵迪寮寮歌 (明治 45 年度) の『都ぞ弥生』の内容とその開拓者精神文化



「都ぞ弥生」歌碑 (昭和 32 年に今はない新恵迪寮前に設置された)

である。

筆者はこの最後の第 3 の特色に注目し、曲の余りにもの有名さほどには知られていない (無名に近い)、この曲の作詞者である横山芳介 (東京都

出身、実家は貴族院書記、小作官、1891～1938、享年 46)、作曲者の赤木颯次(北海道小樽市出身、実家は医院、PL 教団事務長、1891～1959、享年 68)の人と業績、主に横山芳介について紹介する。

### 恵迪寮(旧寮と新寮)

札幌農学校は、明治 9 (1876) 年に開拓使の全寮制国立高等教育機関として W. クラークを教頭に開校し、寄宿舎を有した(1876～1907)。

明治 40 (1907) 年に札幌農学校は東北帝国大学農科大学となり、北 1 条から北 9 条に移転し、最初の恵迪寮となった。恵迪寮の由来は、書経の「迪(みち)に恵(したが)えば吉(よし)」による。

旧制大学(予科 3 年、本科 3 年)の予科寮(旧寮)として開設された(1907～1931)。恵迪寮(旧寮)は現在の北大総合博物館の向い、教育学部の位置にあった。

恵迪寮発足から記念事業として、毎年寮生による寮歌作成がなされ(現在も継続、総曲数は 100 を超える)、6 年後に明治 45 (1912) 年制定として完成したのが、この寮内の 2 学生で作成されたこの名歌『都ぞ弥生』であった。この名歌完成の舞台となった旧寮は、昭和 6 (1931) 年の恵迪寮創立 25 年時に老朽化で解体され、新寮が現在地の北 18 条工学部裏により規模を大きくして完成した。

この新寮(1931～1982 年)が札幌農学校以来の北大精神史を形成する母体となり、多くの恵迪寮出身の人材が育った。

新寮は昭和 57 (1982) 年完成の現寮まで継続使用され、幾多の逸話(『恵迪寮史続』1982 年に詳しい)を生んだ。そして、『都ぞ弥生』の歴史実態と名歌完成の経緯は、2012 年作製の寮歌『都ぞ弥生』完成 100 年記念映像『清き国ぞと憧れぬ』(HBC 制作)で感動的に知られる。

この新寮の遺構は高井元教授ほかの尽力で、玄関と寮生室の一部が初期状態で北海道開拓の村に保存され、上記の映画撮影に供され、北大史を語る貴重な遺産となっている。この新恵迪寮前では、昭和 32 (1957) 年の横山没後 20 年記念で横山夫人・長男芳男氏と赤木氏夫妻が招待され、杉野目学長陪席で歌碑除幕がなされ、横山家菩提寺長源院(静岡市)と同時に建立された。この歌碑は札幌市北区歴史文化 88 選碑でもある。

### 横山芳介(1891～1938 年)の人と業績

横山芳介は、東京都神田で、高級官僚貴族院書記横山光次郎の長男として生まれた。幼少から早熟で文学的才能に恵まれ典型的文学少年であったが、両親の離婚により母とは生別した。不遇な少年時の東京高師附属中学校時に、有島武郎札幌農学校教授が中心に編集したオープンキャンパス本『札幌農学校』(明治 31 年)を入手、作家志望と東北帝大農科大学受験を父に相談したが、役人進路強要で作家志望は拒否された。

作家断念で明治 43 (1910) 年、東北帝大農科大学入学恵迪寮入寮し、小樽市の赤木病院子息で資産家ながら入寮した赤木と運命的出会いをする。赤木はハーモニカとバイオリンの名手で、明治 45 年寮歌作成には、文学青年の横山と最高に合致した。

両者は 1 連ずつこの寮歌の作詞と作曲を進め、七五調の寮歌が多い中、変形の八七調 5 連での作詩は北海道の四季を格調高く見事に捉えたもので、有島も絶賛した内容で完成した。

作詩は、1 番で東京(都)、春で北大受験者(横山自身)の北海道への想念(『札幌農学校』読後か)を詠い、2 番(秋)で 9 月入学後の情景を、3 番(冬)で独特の厳しい北海道氷雪を、4 番(春)で冬を超えた春情景、5 番で冷涼の夏と、まとめて、大志と寮の永遠の発展希求が見事に表現され、文学



「北海道開拓の村」に保存の恵迪寮の玄関に掛かっている表札(昭和 6 年)と内部

的価値が高い。戦災でも残った横山の草稿では、未体験の冬の描写に多くの苦心の跡が見られる。

一方作曲では 1 分間 100 拍テンポで、赤木の寮友は作曲法の専門家（友人の父、芸大教授）の助言を赤木に勧めたが、未変更に固執のまま提出した。この頃の恵迪寮は、舎監有島を中心に、有島を敬慕する横山がリードする文学活動（文学サークル「凍影社」での文芸誌『辛夷』（こぶし）発刊など）が活発化していたが、この寮歌の完成はその活動の最大の成果で、その発表後ほどなく広く全国に流布して、北大を代表する名歌となった。

横山と赤木は作歌活動が原因で 1 年留年し、横山は遠友夜学校教師も勤め（1914 年後半）、工芸作物科を、赤木は畜産科を大正 6（1917）年に卒業した。横山は母校研究室助手を 1 年間勤めたが、翌年砂川土地改良員となり、すぐ静岡県農会技師へ転勤した。この頃、労働争議（都市部の労働者一会社対決）とともに日本労働運動の創始となる小作争議（農村部の小作一地主対決）が裏日本・東北中心に全国的に激発していた。この主な原因は、江戸時代の高年貢からの 60%もの高小作料であり、凶作年には生存の危機からより激化した。

政府は大正 13 年に争議対策として 49 条からなる「小作調停法」を成立させ、横山は全国 16 人の小作官（この法律による地主と小作同盟間を仲介する政府任命官）となり、弱者を守る立場で紛争解決の前面に立ち、農民に多大の信頼を得た。

横山は文学者素質ながら理論的にも優れ、大正 7 年から昭和 11 年までの 18 年間に『静岡県農会報』誌上に 77 本もの先駆的論文を精力的に書いてこの問題に多大の理論的影響を与え続けた。その基本的視点は小作問題の根本的解決を志向するもので、札幌農学校以来の民主主義精神に立つ。

それは、1) 地主、小作者（両者）は、国策の農政の担当者で、社会的優劣のない同等の人権を持つ、階級闘争の対立関係でない。2) 両者は相互に権利義務を明確に尊重する。3) 小作料（争議の根幹）決定は相互の決定による。4) 土地改良の保障をする、という優れたものであったが、その実現のための激務による消耗で、人道的な小作官として農民に惜しまれつつ、昭和 13 年に 46 歳で結核により早逝したが、生前の功績は同年に正五位に



横山芳介（『小作官・横山芳介の足跡』より）



赤木顕次（「北海道開拓の村」恵迪寮展示より）

叙勲されて讃えられた。

家庭的にも 1 男 3 女に恵まれ、かつて名寮歌を生んだ文学を好んだ性格は円満で、13 歳の孤児（川田悠紀恵、成人後に料亭経営）を遠友夜学校精神で家族同様に育てた。これを静岡県に出張中の北大関係者が知り、1957 年の長源寺と北大の歌碑設立のきっかけとなった。

### 赤木顕次（1891～1959 年）の人と業績

一方、作曲者の赤木は激動の人生を送った。北大卒業後、東京、広島で、食品化学会社研究員、東京帝国書院で教科書編集、中学教師を転々とした後に、昭和 6 年新興宗教団体「ひとのみち」教団に入り、副教祖（6 人）の一人となったが、昭和 13 年不敬罪で教団解散となった。戦後、昭和 21 年にこの教団の後身の PL 教団結成に加わり、事務長として信者 50 万人、大本殿建設、PL 学園高校（甲子園の常連強豪校、桑田、清原輩出）、短大の設置を統括した。上記のように、赤木は横山没後 20 年の歌碑除幕式典のうちに妻とともに来札し、『都ぞ弥生』の形成と発展の伝統を語り（山口哲夫著『都ぞ弥生』東京エルム会寮歌出版会、1978）、翌年 68 歳で横山と異なる長い破乱に富んだ人生を終えた。

### 『都ぞ弥生』の歌唱法の「謎」を解明する

歌う者に不思議な独特の万感感情を湧き起させるこの曲の歌い方は、時代とともに大きく変化し、これは他大学校歌にない特色である。

原曲の作者赤木は非常に速いテンポ（1 分 100

拍)をマエストーソ(荘重に)でと指示したが、これは無理で、他校(東大寮歌、京大寮歌、早大校歌ほか)並みのテンポ(80)となった。筆者の学生時代では3倍のスローテンポ(30)で、御詠歌のようであった。現在(合唱団歌唱)のものは初期テンポ(70)に近く、1900年有島作詩の札幌農学校校歌『永遠の幸』(G.ルート作、南北戦争北軍行進歌の翻訳)の曲想に合致する学生歌らしいリズム感がある。また、この御詠歌調と合唱団調を混合した、節ごとに伸ばす歌い方(現在の応援団調)の変形もあり、正調『都ぞ弥生』は存在しない、と言えるが、青春の象徴の学生歌斉唱は時代とともに変化してもよいと筆者は考える。

「謎」のこの御詠歌調の非常に遅い歌調の成立には諸説ある。

1)徴兵令(兵役法)は昭和2年制定で、昭和10年代予科生にも20歳に達し、招集令状が来た寮生もいた。出征寮生送別行進で、恵迪寮から札幌駅まで(30分)送るのに、元々の速いテンポでは、5番まで歌唱しても5分で終了するので、5倍に伸ばした(恵迪寮OBの尾郷賢医師談)。

2)恵迪寮生の円山公園での観桜会会場から帰寮まで30分で、5番まで歌唱し戻った。

## 編集後記

北海道は、21号台風(9月5日)に続いて震度7の地震(6日)のため、土砂崩れなどの被害と停電、断水などで大変な日々でした。亡くなられた方々、被災者の皆様にお見舞い申し上げます。

北大総合博物館は、展示物への大きな被害はありませんでしたが、20%の節電のため9月14日迄閉館になりました。博物館横のエルムの大木にも被害がありました。(右写真)

3)大通り公園のストーム場所から帰寮まで徒歩30分以上あり、伸びた歌調で繰り返し歌った。等だが、1)が真相に近く、哀愁の歴史を持つ。

現在でも、この名歌には勇壮な前口上が付くが、これは、戦後の学生が昭和11年寮歌の前口上(作詞者は宍戸昌夫氏、遠友夜学校教師)を結合したもので、時代背景も異なり、この混合寮歌には、作詩者宍戸、朝比奈、藤田氏ほかの批判があるが、低速の歌調に合う面もある。

いずれにせよ、名歌『都ぞ弥生』の作者は二人とも、間違いなく当時の抜群の逸材であり、その後も、その歌の大きさに相応しい人生を終えたと言える。

二人は冒頭に揚げた北大輩出偉人ほどの国際的業績は残さなかったが、ともに非凡であったこの二人を札幌に引き付けた事実は、まさしく内村、新渡戸の言う悠久の北の自然に支えられた札幌農学校以来の自主独立、開拓者精神、高邁な理想に生きる校風の証明であった。

参考文献：田嶋謙三・塩谷雄・大高全洋著『小作官・横山芳介の足跡』(北大図書刊行会、2003)、北海タイムス社編『北大百年の百人』(1976)



## 北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース No. 50 号

- ◆編集人：北海道大学総合博物館ボランティアの会(編集委員：星野、今井、大山、沼田、久末、山岸)
- ◆発行人：在田一則
- ◆発行日：2018年9月10日
- ◆連絡先：〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目 Tel: 011-706-2658
- ◆ボランティア ニュースは、博物館のホームページからもご覧になれます。  
<https://www.museum.hokudai.ac.jp/lifelongeducation/volunteer/volunteernews/>